

Ruzhdi Ushaku: "Veta" dhe "Askushi" (OÛTIS)

井浦 伊知郎

Ruzhdi Ushakuによるアルバニア語の論文「VetaとAskushi (OÛTIS) — アルバニア説話『漁師と精霊』と『オデュッセイア』のエピソード『オデュッセウスとポリュペーモス』に於ける構造の比較研究」(1981年)を紹介する。

アルバニア語の表現には、「自分」「自身」をあらわす代名詞Vetaを用いて、「誰がそんなことをした? 自分(Veta)だよ自分(Veta)」や「自分(Veta)がしたことなら誰もしない」等と言うことがある。「自分の身にふりかかったあやまちは、大抵自分の責任だ」という言い回しであるが、本来こうした言い回しの起源は、アルバニア各地に伝承されている幾つかの似通った説話の中にあるという。Ushakuがあげている四篇の説話の日本語訳を次に示す。何れもアルバニア北部のゲグ方言(gegërishte)で書かれている:

「その一 漁師と魔物」

Zallで一人の漁師が網で魚を捕った。魚を何匹か捕り、自分の小屋で串に刺して焼き始めた。彼が火で魚を焼いていると、魔物が串に刺した亀(蛙)を持って小屋に現れ、それを焼き始めた。漁師は亀を持って帰れと何度も言い、魚を一匹与えたが、魔物は「おまえが焼くならおれも焼くさ」と言うのだった。こういうことが何回もあった。漁師はどうにかして魔物をこらしめてやろうと考えたので、魔物が「おまえの名は何という」と尋ねた時に、「Vetaさ」と答えた。それから漁師は火のついた薪(串)を手につくと、魔物に火傷を負わせ(て追い出し)た。魔物は叫び声をあげ、天に戻って言った「おれを刺しやがった、おれを焼きやがった」他の魔物達が「だれがそんなことをした」と尋ねると「VetaだよVeta」と答えたので、魔物達は「そりゃ結構、Veta(自分)がやったというんなら、そりゃおまえのせいだ」と言った。それから、「おまえが焼くならおれも焼くさ」「だれがそんなことをした」「VetaだよVeta」「そりゃおまえのせいだ」という言葉が残った。

「その二 船乗りと精霊」

ある船乗りが Ulqini 付近の Valdanas で船から小船を出し、Kroni i Zanave へ水くみに行き、浜辺で網を引いて魚を捕った。魚を少し捕ってから火をおこし、魚を焼き始めた。精霊がやって来て「おまえが焼くならおれも焼く」と言った。船乗りは初めは声が出なかったが、精霊が名前を尋ねたので、彼は「Veta」という名前だと言った。しばらくして船乗りは精霊を火のついた薪で追い回して火傷を負わせたので、精霊は叫び声をあげて仲間に助けを求めに戻った。「だれがそんなことをした」と仲間達が尋ねた。「Vetaだよ、Veta」と精霊は答えた。「そりゃおまえのせいだ」と仲間達は言い、そいつが自分を薪で焼いたのだと思った。

「その三 漁師と精霊」

ある漁師が、Shpellë e Qelbët で夜、魚を焼いていると、獣の様に毛むくじゃらの身体をした一匹の精霊がやって来た。漁師が魚を焼くと、精霊は「おまえが焼くならおれも焼く」と言った。そして話をしている時、精霊が漁師に名前は何だと尋ねたので、彼は「Vetaさ」と言った。それから漁師は串（薪）を持つと精霊を追い回したので、精霊は悲鳴をあげて、洞穴にいる他の精霊の仲間達のところへ戻った。彼らが「だれがそんなことをした」と尋ねたので、精霊は「Vetaだよ、Veta」と答えた。「そりゃおまえのせいだ」と他の精霊達は返事をした。こうして漁師は精霊達から難を逃れた。

「その四 牧人と魔物」

Sesputi に Syla という名の羊飼いがいた。Syla は我が Ftjan 村の出身だった。

ある夜 Syla は魚を捕って焼いていた。小屋で魚を焼いていると、一匹の魔物が手に亀を持って現れた。話をしていた時、魔物は Syla に何という名前か尋ねた。Syla は「Vetja」という名だと言った。それから魔物は手にしていた亀を焼こうと Syla の火のところに来た。Syla はそれが嫌で、何をしているのかと言った。魔物は「おまえが焼くならおれも焼く」と返事をした。Syla はますます嫌になって、足をつかむと小屋から放り出した。魔物は大きな悲鳴をあげたので、岩陰から他の魔物達が出て来て、どうしたのかと尋ねた。Vetja がおれを焼きやがった、Vetja がおれを焼きやがった、と魔物は答えた。他の魔物達は「おまえが焼いたというんなら、おかしな鳥みたようなことをするでない【訳註：訳のわからないことを騒ぎ立てるな】」と返事をした。

一方、ホメーロスの「オデュッセイア」第IX章には、これらの説話と大変よく似たエピソードがある。キコン人（Κίκωνες）の国で葡萄酒12甕と贈物を受けたオデュッセウス（Ὀδυσσεύς）が、ロートパゴス人（Λωτοφάγοι）の国を過ぎた後、単眼の魔物ポリュペーモス（Πολύφημος）の棲む島で捕われの身となる下りである。仲間を二人まで喰われたオデュッセウスは、難を逃れる策として、まずポリュペーモスを葡萄酒で酔わせる。そしてポリュペーモスがオデュッセウスに名を尋ねた時、オデュッセウスは次の様に答える（日本語訳は呉（1971）訳より引用）：

"Οὐτίς ἐμοὶ γ' ὄνομα. Οὐτὶν δέ με κικλήσκουσιν,
μήτηρ ἤδὲ πατὴρ ἤδ' ἄλλοι πάντες ἑταῖροι."

「『駄礼毛志内(ダレモシナイ)と私はいうので、駄礼毛志内と母親も父親にしても、そのほか仲間の人たちが皆が、私のことを呼んでおります。』」

(IX 366-367)

ポリュペーモスが酔いつぶれて眠り込むと、オデュッセウスと仲間達はポリュペーモスの単眼に焼いた棍棒を突き刺す。ポリュペーモスは悲鳴をあげて飛び出し、仲間のキュクロープス共（Κύκλωπες）に助けを求める。だが：

"ὦ φίλοι, Οὐτίς με κτείνει δόλω οὐδὲ βίηφιν."
οἷ δ' ἀπαμειβόμενοι ἔπεα πτερόεντ' ἀγόρευον.
"εἰ μὲν δὴ μή τίς σε βιάζεται οἷον ἐόντα —
νοῦσόν γ' οὐ πῶς ἔστι Διὸς μεγάλου ἀλέασθαι."

「『おい仲間たち、わしを欺して殺すとは、駄礼毛志内よ、暴力でもな。』すると一同これに返答すると、翼をもった言葉を列ね、

『もしほんとうに、誰もお前が独りでいるのへ、乱暴をしたのでなけりゃ、ゼウス大神から来た病気なのだ、どうにも仕様があるまいよ、』

(IX 408-411)

夜が明けると、オデュッセウスと仲間達は羊の腹に隠れてポリュペーモスの洞穴を抜け出し、首尾良く島をあとにする。

Ushakuは、先にあげたアルバニアの説話と「オデュッセウス」の一エピソードとの間には、内的構造と結末の象徴的役割に於いて幾つかの類似が見られると指摘している。即ち、人間と神話的人物の対立、VetaとΟὐτίςの如き両義的な偽名の詐称、神話的人物に対する襲撃、偽名による報復回避といっ

た項目について、アルバニアの説話とオデュッセウスのエピソードは酷似しているのである。

ここでUshakuは、先にあげたアルバニアの説話群がホメーロス作品からの借用か、それともアルバニア人の祖（とされる）イリュリア民族本来の伝承かという問題について次の様に考えている。アルバニア説話の構成が甚だ簡潔、緻細で、粉飾も誇張もなく、基本的に説話的断片の枠組から成り立っていることから、象徴的な内的機能と娯楽の精神、また人間の経験に関連した象徴的な生の方向性により編纂、保持されてきた古い民間伝統との関連が見られること。

また登場人物と物語の進展状況が、アルバニアの説話環境に見合ったものであり、一定の結末にとり必須の機能を除けば、余分に目立った箇所は全くない。これに対してオデュッセウスのエピソード内の物語進展に於ける登場人物や状況や文脈は、詩的かつ絵画的特徴という点で際立っている。即ちアルバニア説話とは全く別のものであり、より広大な構成文脈内にあること。

またアルバニア説話のオリジナリティーに関する重要な論拠が、正に物語の結末にとって主要かつ決定的要素としての両義的偽名Veta或いはVetjaにあること。

要するに、まずアルバニア説話の簡潔・素朴たることを以て、ホメーロスの複雑・壮大たることに比較しているが、この観点のみで民間伝承のオリジナリティーを論証している訳ではない。登場人物の偽名として、Οὐτίςの様な否定代名詞の別形でなく、再帰代名詞Veta或いはその方言形が用いられているということが主に興味深いという。次にUshakuは、Οὐτίςが本来の否定代名詞形Οὐτίςから別形として現れる歴史的背景を説明し、アルバニア語のVetaについても同様に考察している。

続いて、他のヨーロッパの民間伝承や、かの「千夜一夜物語」にも同一パターンの説話が普遍的に見られると述べた上で、オデュッセウスとポリュペーモスのエピソードが後に挿入された詩句ではないかと指摘する（ここで、キコン人の国からキルケー（Κίρκη）の島へ着くまでにオデュッセウスが失った仲間の数が、計算に合わないということも示されている）。

更にUshakuは、アルバニア語による民間伝承の中には、既にあげた「漁師と魔物」型説話とは別に、「一つ目の巨人（Divit me një sy）」嘶、キュークロープスを想起させるSiqëhenjeri（"syqen që ha njerëz"即ち『人間を喰うところの四つ目の怪物』）の話が知られていること、Ὀδυσσεύςの古形Odyxeusがイリュリア・エピルス語起源で「船乗り」を意味するという説を紹介し、かつてのイリュリアと、そのホメーロス作品に対する影響（『オデ

『オデュッセイア』第VI章の冒頭で述べられているパイエーケース人(Φαίηκες)がイリュリア人であるという、ローマの地理学者Pomponius Melaの記述等)について説明し、最後に次の様な結論を示している:

1.『漁人と魔物』の様なアルバニアの説話や、そのヴァリエーションは、『オデュッセイア』に於けるオデュッセウスとポリュペーモスのエピソードのヴァリエーションでも借用でなく、オリジナルの説話である。

2.アルバニア説話は、オデュッセウスとポリュペーモスのエピソードに於けるモチーフに類似しており、極めて古い起源を持つ。

3.アルバニア説話のモチーフは、同様のものがギリシア人の中にも存在し、『オデュッセイア』内のエピソードとして記述、加筆されたのと同時代に、イリュリア人の中にも存在した。アルバニア説話のモチーフと内的構成及びその結末は(出来事の中核に重要でない要素の進展を無視すれば)イリュリアのオリジナルだといえる。

論文の全訳は別の機会に紹介したい。

Ushaku, Ruzhdi(1981); "'Veta' dhe 'Askushi'(Οὐτρίς). Studim krahasues i strukturës së tregimit shqiptar 'Peshkatori i xhindi' dhe të asaj të episodit 'Odiseu dhe Polifemi' të Odisesë": *Kërkime Filologjike*, 9-31 (Prishtinë(Kosovë), Rilindja)

吳茂一(訳)(1971);『ホメーロス オデュッセイアー(上)』(岩波書店)